向日葵だより

黒沼共同会計事務所
Kuronuma Accounting Office
2019年6月10日発行　第261号

東寺(とうじ)ってどんなお寺？

～身は高野 心は東寺に おさめをく 大師の誓い 新たなりけり～

先月の11日「志ネットワーク・丹後講座」参加の折に、京都に前泊して予ねて行ってみたいと思っていた「東寺」を案内してもらいました。ネットワーク会員の中でも博識な近藤秀二さんのお誘いもありましたので、、、、

上甲晃先生の昨年のデイリーメッセージに四国八十八か所お遍路参りの募集案内もありましたし、常々機会があれば行ってみたいと思っていましたので、空海（弘法大師）がその建設に関わったという東寺にはどうしても行ってみたいと思っていたのです。

京都の寺々の中でも東寺は抜群に古く、西暦794年桓武天皇は動乱の中に奈良から長岡京を経ての平安京へと都を遷され、羅城門を挟んで対になる西寺（さいじ）と共に計画された、いわゆる東寺は国の寺、政府の寺だったと言われます。別名「教王護国寺」とも呼ばれ（天皇に教えを授ける寺）寺の格式の高さを端的に表していると、近藤さんは写真のベストスポットを漏らすことなく丁寧にご案内してくださいました。

近藤さんによれば、諸事情で東寺、西寺の建設は他の社寺よりも後まわしになっていたのですが、嵯峨天皇がその責任者として空海を指名したことで建隆のスピードは一気に速まったそうです。空海は一時期はここに住み込んでいた処でもあり、今でも東寺は平安京時代を思い描ける唯一の存在であるとか。作家の司馬遼太郎さんは京都で人と待ち合わせる時、いつも「東寺の御影堂の前」であったことなど、さまざまな歴史上のエピソードを教えていただきました。そもそも京都と言えば有名な社寺が数多く訪れたい観光地であるわけですが、私は弘法大師が東寺の建設に直接関わったことや、東寺には81点の国宝があり、それは日本全体の約一割にあたるなど、近藤さんから説明を受けるまでは全く知りませんでした。

東寺は創建以来千二百年の間に幾度も台風、雷火、兵火等の災害を受け、堂塔の大半を焼失しましたが、その都度、一般民衆の信仰の力によりもとの姿に再建され、とくに五重塔は古都の玄関の象徴として昔の姿をそのままに伝えて今日に至っております。

なお、境内には立派な大きな柳の木があります。風で葉がそよそよと揺らぐ姿も風情を感じます。
この柳の木こそ「小野道風（おののとうふう）ゆかりの柳」でありました。平安時代の貴族であった道風に関して私の知っている昔からの逸話があります。
「自分自身に書道の才能がないと落ち込んでいた道風は、蛙が柳の葉につかまろうと何度も何度も挑戦し、見事に飛びつくことに成功した姿を見て”諦めずに努力をすれば必ず道は開ける”と書道に一層励むことを決意し、やがて書道の達人となったのです。」
傘をさした道風と柳の蛙の絵柄は、花札の中で唯一、人物が描かれているあの札です。

黒沼範子